

令和 6 年 9 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01318

研究課題名（和文）中国古代軍事史の多角的検討 - 「公認された暴力」のありか

研究課題名（英文）A Diversified Analysis of the Early Chinese Military History: The Whereabout of Sactioned Violence

研究代表者

宮宅 潔 (Miyake, Kiyoshi)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：80333219

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究計画は、近年における歴史学諸分野の動向をふまえ、中国秦漢～隋唐時代の軍事に関わる問題を幅広く取り上げ、新たな軍事史研究の可能性を切り拓くことを目指した。具体的には、新出文字史料の会読・分析を行う一方で、関連する諸問題について共同研究者の間で討議を重ねた。史料読解の成果としては、2023年に『岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注』を汲古書院より刊行した。また、共同研究者による研究発表を土台にして、2022年に国際シンポジウムを開催し、さらにそこでの成果に基づいて、最終年度に論文集『暴力のありか 中国古代軍事史の多角的検討』を臨川書店より刊行するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、世界の歴史研究者は、戦争をはじめとした暴力について、それぞれの社会が持つ歴史的なコンテキストに沿ってそれを理解し、その変遷をたどることを目指している。だが日本の中国学研究においては、こうした研究動向に反応する動きが乏しかった。本研究項目では、暴力にかかわる問題群を総合し、そこに中国史を分析するための足がかりを得ようとするを試み、その成果として刊行した報告書では、様々な角度から暴力が論じられ、暴力が専制体制の形成のなかで果たした決定的な役割はもとより、それが政治・経済における中国の一体化をも促したことや、「漢民族」という概念を定義づける一つの力でもあったことが、改めて明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research project covered a wide range of military issues from the Qin-Han to Sui-Tang periods in China, aimed to open up new possibilities for military history research, based on recent trends in various fields of historical study. In particular, we organized a joint reading group, analyzed newly recovered manuscripts, and at the same time, periodically held discussions among collaborators about various related issues. As a result of close reading, "Annotated Translation of the Qin Statutes and Ordinances (vol. 1) in the Bamboo Slips Collected by the Yuelu Academy" was published by Kyuko Shoin in 2023. In addition, based on the presentations of collaborators, an international symposium was held in 2022. The final result report published by Linsen Shoten in 2024, "The Whereabouts of Violence: A Diversified Analysis of the Early Chinese Military History", was composed by articles of the panels in this symposium, as well as contributions from other collaborators.

研究分野：中国古代史

キーワード：中国古代 軍事史 暴力 制度史 社会史

1. 研究開始当初の背景

現在、世界の歴史研究者は、戦争をはじめとした暴力について、それぞれの社会が持つ歴史的なコンテキストに沿ってそれを理解し、その変遷をたどることを目指している。だが日本の中国学研究においては、こうした研究動向に対して反応する動きが乏しかった。そもそも、我が国では第二次大戦後、「軍事」をタブー視する風潮の中で、軍事史研究がやや特殊な扱われ方をしてきた。中国古代史についていえば、当該時代の徴兵制度は、あくまで徭役制度の一部として取り上げられ、武官号の研究も官僚制度研究の立場から進められ、それらが軍事と深い関わりを持つことが等閑視される傾向にあった。

だが戦争や軍隊をめぐる問題は、特定の時代に限って、特定の社会層のみに影響を与えたわけではない。それは政治史を左右しただけでなく、王朝による財政活動の指針を決定し、時として社会変革の一因となり、人々の価値観や美意識にすら影響を及ぼした。とりわけ秦漢時代には、あらゆる成人男子が生涯に一度は従軍する建前だったので、その影響力が及んだ範囲はより広く、より深かったはずである。さらに突き詰めていえば、「天」によって是認された暴力の執行は、「天子」たる皇帝の権威を根底で支えるものでもあった。タブーを乗り越え、軍事や暴力とかわる問題に正面から取り組む必要があった。

2. 研究の目的

研究代表者は、かかる問題意識の下、これまでも軍事史研究に取り組み、軍事制度、ならびに軍事と民族との関係性について研究プロジェクトを組織し、すでに一応の成果を挙げてきた。本研究では、それらの成果に拠りつつ、考察の対象を社会・文化の諸相にまで広げ、軍事を中核にすえて歴史学のさまざまな領域の問題を分析する。具体的には、次の諸点を考察の対象とする。

(1) 軍事制度史：国制における「武」の位置づけ

中国古代の諸制度を、「軍事」を切り口にして据え直すことにより、「尚文卑武」の理念から説明されてきた中華王朝の制度設計を再検討する。たとえば、秦漢時代には広く一般人にも爵位が与えられたことから、爵制が持つ諸機能のうち、基層社会に新たな階級秩序を与える役割のみが強調される傾向にあった。だが爵位は元来、軍功に対する褒賞であり、むしろ軍功報償制の歴史のなかに位置づけられるべきである。かかる問題意識から爵制を分析し、さらには官僚制・徴兵制・兵站制度なども同様に検討の俎上に載せる。

(2) 軍事社会史：社会の縮図としての軍事組織

すべての良民男子が従軍することになっていた秦漢時代には、さまざまな地域・階層の人間が軍隊を構成し、それは社会の縮図となっていた。かかる制度は後漢時代から変容し、兵農分離が進むものの、魏晋以降は異民族が新たな兵士の供給源となり、こんどは多民族混交の社会状況がそこに反映された。こうした軍事組織の分析を透して、各時代の社会構造を解明することを目指す。

(3) 軍事社会史：社会の統合と軍事イデオロギー

兵農一致の時代には、ほとんどの成人男子が軍隊での体験を共有していた。この点に着目する研究者は、従軍時の「軍中教育」の重要性や、それが王朝への帰属意識を高めたことなどを指摘する。後漢時代以降は軍隊生活を直接経験しない者が増加するが、それでもなお軍事的な儀式や記念物、あるいは勝利/敗北の伝承は、人間集団を統合する求心力の源泉であり続けた。これらの論点に関わる問題もまた考察の対象とする。

(4) 軍事文化史：思想問題としての戦争

漢代以降、社会に強い影響を与えた儒教は、原則的に暴力を卑しむ。その一方で「正義のための戦争(「義戦」)」という観念が儒教のなかにも存在しており、とりわけ「蛮夷」から「中華」の文明を防衛するという名目下では、むしろ暴力が積極的に肯定された。いわゆる攘夷論である。こうした中国古代の戦争観を時代ごとに検証する。その先には、近年の「正義(Just War)」をめぐる議論との比較研究も見えてこよう。

そのうえでこれらの問題群を、帝制中国において暴力がどのように位置づけられ、社会にどのような影響を与えていたのかという視点から総合的に検討し、そこに新たな中国古代史像を見いだすことを目指した。

3. 研究の方法

研究組織は、宮宅を研究代表者とし、それに国内から5名の研究分担者、2名の研究協力者、さらに5名の海外共同研究者が参加する。そのうえ次の4つの研究領域について、分担して研究を行った。研究遂行にあたっては、具体的には以下の3つの活動を進めた。

(1) 新出文字史料の会読・分析

出土史料の読解のうち、秦漢時代の木簡史料については、秦漢史研究者（佐藤・鷹取・古勝・藤井・宮宅）が京都大学で定期的に会読を行うかたちで進めていく。海外共同研究者も短期集中的にこの会読に参加し、懸案となる問題について共に議論する。得られた成果は、京大・人文研の紀要『東方学報』に順次発表し、広く学界からの評価・批判を仰ぐ。

(2) 研究会・国際シンポジウムの開催

個々のメンバーが進める研究テーマについて、定期的な研究発表をその土台に据える。研究発表での討議により各自の研究を深化させつつ、研究計画の中間年度には、中国・武漢大学で国際シンポジウムを合同で開催し、より多くの研究者と各テーマについて議論する。

(3) 成果の発信、および社会との共有

五カ年計画の最も重要な成果として、訳注書および論文集を出版する。論文集には収められない、会読の成果なども、武漢大学の「簡帛網 <http://www.bsm.org.cn/>」を活用し、中国語で発信する。さらに研究成果を分かりやすく社会に発信するチャンネルとしては、人文科学研究所で一般向けの講演会を企画・運営している「人文研アカデミー」に参加し、連続講演会を開催することを計画した。

4. 研究成果

(1) 新出史料の読解と訳注作成

『岳麓書院蔵秦簡〔肆〕秦律令（壹）』および同『秦律令（貳）』の会読を主として進め、『東方学報』95（2020）～98（2023）にその訳注を毎年発表した。読了した『秦律令（壹）』については、『岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注』（汲古書院、2023）を刊行した。この書には訳注とともに、研究分担者、さらにはその他の参加者が作成した研究ノートも収められており、総頁数が600頁を超える充実した研究成果となった。

(2) 国際シンポジウムの開催

当初は研究計画の中間年度に、武漢での開催を目指していたが、新型コロナウイルスの影響により、第4年度の2022年12月に、国際シンポジウム「中国古代軍事史の多角的検討」をオンライン形式で開催した。共同研究者による研究発表・コメントのほか、コメンテーターとして石谷慎（京都府立大）・土口史記（岡山大）らも参加した。対面参加したのは、報告者やコメンテーターなど最大でも10人程度だったが、オンラインでは100人を超える参加者があった。

(3) 成果報告論文集の刊行

上記シンポジウムの報告者から報告内容を踏まえた論文の寄稿を得て、さらにその他のメンバーからの寄稿も加えて、最終年度に成果報告書となる論文集を刊行した。『暴力のありか 中国古代軍事史の多角的検討』（臨川書店、2024）である。その内容は以下のとおり。

第1章「中国古代史における暴力」（チャールズ・サンフト）は、古くは甲骨文字から、『詩経』、『孫子』、『論語』などの諸子百家の書、さらには『春秋』や秦刻石、『史記』など、中国古代のさまざまなテキストを取りあげ、戦争や暴力がどのように記述されてきたのかを整理する。それによると、『商君書』などを例外として、多くのテキストで暴力は否定的に捉えられ、時としてそれについての言及が故意に避けられるのだが、『史記』では一転して暴力が好んで語られ、そこに大きな変化が認められる。かかる変化が生じた背景としてサンフトは、自らの暴力によって「平和」がもたらされたのだと秦が主張したこと、そしてその秦による暴力を、続く漢王朝がことさらに強調したことに注目する。これにより暴力の表現方法に変化が生まれ、暴力がむしろ仔細に語られるようになったと見るのである。

第2章「中国古代の正戦論と『史記』の戦争叙述：暴力正当化の基準をめぐって」（金 乗駿）は、戦争という暴力に焦点を絞り、それを正当化する理論、すなわち正戦論の類型と、その通時的な展開とについて検討する。中国古代には、戦争を肯定する論者も非難する論者もいたが、彼らはいずれも「正しい戦争」の存在を認めていた。戦争を正しい（「義」）ものと見なす条件は論者により異なり、その厳密さもさまざまだったものの、「不義」を一種の犯罪とみなし、その討伐を刑罰として捉えるというスタンスは、いずれにおいても共通していたという。そのうえで金論文は『史記』の戦争記事を分析し、「不義」が否かを判断するための材料を明示しようという意図を、司馬遷ははっきり抱いていたとし、さらにその評価基準に従うなら、武帝による匈奴への遠征については、司馬遷はこれを正戦とは認めていなかったと指摘する。司馬遷が戦争の正当な理由とするのは相手方の先制攻撃、あるいはそれに繋がるおそれもある相手方の法律/約束違反である。中国的な防衛第一主義（the cult of defense）をめぐる議論とも関わってくる問題であり、また本章は第1章とともに、秦による統一のインパクトや「史記の筆法」を検討の俎上に載せることにもなっている。

第3章「両漢の田獵賦と軍礼：暴力の儀礼化に関する一断章」（佐藤達郎）では、皇帝による狩猟のさまを描いた「田獵賦」が取りあげられ、前漢と後漢との間でその内容が如何に変化したのか分析される。大量の兵士が勢子として動員される田獵は、一方で軍事訓練としての性格を

色濃く帯びている。また、そこではあまたの獲物が殺され、力比べなどの余興も行われ、暴力のまわりを祝祭的な雰囲気を取り巻く。本章では、さまざまな角度から田獵の持つ意味と機能とが論じられ、武事と嘉事の入り交じった世界観が明らかにされると同時に、それが儒教倫理の圧力をうけて、次第に儀式的なものへと変容していく経緯がたどられる。

第4章「南北朝時代における仏教と軍事：僧伝の検討」(古勝隆一)は、当該時代における仏教と軍事の関係を、北朝と南朝とのあいだの相違や、僧伝作者の著述方針などに留意しつつ、さまざまな角度から検討する。たとえば、北朝では戦争に際し、高僧の予知能力を勝利のために役立てようという企図がはっきり認められるが、南朝ではそうした意識が薄く、仏教が殺生を悪とすることも認識されていたらしい。ただし、南朝でも僧侶が戦争の行方を占っている事例がわずかながら存在し、戦争に関わる事績が僧伝では故意に語られていない。サンフト論文のいう「戦いの省略記号」という可能性も残る。暴力は仏教者にとって避けるべきものだが、暴力を行使する国家からの保護は、中国の仏教教団が必要とするところであり、時には教団自身が、自らを守るためにそれを行使することもあった。暴力へのまなざしが、そこではさまざまに交錯している。

コラム「唐代における動乱の発生とその暴力の源：「安史の乱」再考」(森部豊)では、安史の乱の原因とその背景をめぐる議論が紹介され、そのうえで「反乱」という暴力が生み出されるところの源泉に注目してみると、安祿山の勢力は「公認された暴力」と「私的な暴力」とが入り交じる、複雑な構造になっており、この点に十分注意すべきことが強調される。

第5章「新発見の簡牘から見た秦～前漢初期の傳籍制度の沿革」(陳偉)では、傳籍される、すなわち徴兵対象として登録される基準について、それが何歳からであったのかが、新出の簡牘史料を縦横に駆使して、細かく検討される。結論として、当初は16歳であったのが、やがて18歳以上へと引き上げられ、さらにそれが漢初には20～24歳になったとされる。緻密な制度考証の末に得られた結論は、期せずして戦時から平時へと向かう歴史の展開と、完全に符合している。

第6章「征服軍の撤退：里耶秦簡よりみた占領統治の展開」(宮宅潔)は、現在活用できる里耶秦簡のうち、年代の特定できる簡を時系列に沿って分析し、始皇帝の軍事的な勝利・占領軍の駐屯から、県を設置し、占領軍が撤退し、日常的な統治が滑り出すまでの経緯が、里耶秦簡の出土した秦の遷陵県を舞台にして再現される。県の設置とそれを通じた統治とが速やかに開始されていることに驚かされる一方で、決して順調とはいえない統治のありさまや、慌ただしく最前線へと転戦していく占領軍の動きのなかに、秦による統一が早々に破綻した背景も垣間見える。

第7章「戦時体制から日常行政体制へ：秦漢時代の県の治安担当官吏について」(孫國博)では、地方行政組織の末端にあって治安を担当する「亭」の役人や、県の配下にあるその他の治安担当官吏について、その秦から後漢にいたるまでの変遷が論じられる。秦～漢初の亭の責任者は「校長」で、さらに「士吏」が県内を巡回し、治安維持を担当していた。校長も士吏も県尉に統轄される武吏で、治安維持の組織は濃密な軍事的色彩を帯びていた。だが前漢中期以降、亭の責任者は「亭長」となり、その秩禄は校長よりも低下する。また士吏の姿も県尉の配下から見えなくなり、代わって「游徼」が現れる。游徼は県の「外部の吏」であり、県令が取り仕切る県廷によって署任される。孫がかねてから主張する「戦時体制から日常行政体制へ」という官僚組織の変化のなかにあっては、治安担当官吏もまたその例外ではないのである。

第8章「唐代節度使の出現原因：対外戦争の様相変化を手がかりに」(李基天)は、唐代に強力な藩鎮が地方に割拠した背景として、戦争のやり方が大きく変化した点に着目する。すなわち、当初の対外遠征は大軍を動員し、短期間で一挙に決着をつける方針であったが、次第にそれが長期化し、各作戦地区に常駐兵が置かれるようになった結果、その先に強力な節度使が出現する、というのである。戦闘が長期化した原因の一つには、優秀な軍事指揮官の不足という問題があり、これもまた「戦時と平時のはざま」に生じる普遍的な現象といえるだろう。

第9章「戦争と王権：『商君書』にみる「強国」「天下」と軍功爵制」(佐川英治)は、まず『商君書』諸篇の成立年代を検討し、前半がより古く、後半が相対的に新しいことを明らかにする。さらにこの年代比定に沿って、富国強兵「強国」の目指すところが分析され、それが時代を追って都城の防衛から領域の防衛へ、さらには天下の併合へと推移していることが指摘される。軍功爵制の詳細を記した境内篇は『商君書』の後半に属し、従ってそこに記された制度は実際には商鞅のものではなく、より後代の、天下併合のための大規模な殲滅戦が行われた時代のものであったことになる。斬首への授爵のみならず、さまざまな軍事的貢献への「賜爵」をも規定しているのは、境内篇の書かれた時代、すでに戦争が大規模かつ長期的なものとなり、それを指揮する君主の主体性が強まっていたからだ。佐川論文は結論する。戦争が単発の武力衝突から、すべての国力を傾けた総力戦へと展開してゆくなかで、それを総括する者として君主の存在感も高まり、賜爵を通じてさらに確固たる権威を得たといえるだろう。

続く第10章「戦争と貨幣：秦の占領統治と半両銭の流通」(宮宅潔)は、秦の新占領地で鑄造貨幣が如何に使用されていたのかを整理し、物資調達のために十分な量の鑄貨が必要とされており、そのためには外部からの鑄貨供給が決定的に重要だったことが明らかにされる。そのうえで半両銭の出土状況や兵站関連の法律条文が分析され、鑄貨の使用が秦の軍事行動と深く結びついていて、征服活動によって高まった社会の流動性が、それに拍車をかけていたであろうことが推測される。戦争・国家・市場のあいだに育まれる強い結びつきは、秦漢時代における鑄造貨幣の爆発的な拡大について考えるうえで、決して見逃せない視点である。

第11章「軍事と刑罰：秦漢時代における軍事の地位低下についての試論」(鷹取祐司)は、

中国における軍事の地位低下、すなわち「文」が「武」よりも上位に置かれ、兵士になることが蔑まれるような風潮が、いつ、いかにして生まれたのか、という問題に取り組む。これについては、後漢の初めに行われた普遍的徴兵制の廃止、および募兵や異民族兵への依存度の増大を一つのメルクマールとする論者もいるが、鷹取論文はさらに時代を遡り、秦漢の律令に現れる「戍刑」という刑罰に注目する。この刑罰は元来、軍功褒賞である爵位の授与と表裏の関係にあり、戦場での失態に科される制裁として、主たる制裁である奪爵とともに用いられ、それを補完するものであった。春秋戦国時代、庶民をも戦争に動員し、その戦闘力を褒賞と刑罰という二つのサンクションで維持しようとした結果、軍事と刑罰とが結び付き、従軍は苦役とみなされ、このことが軍事の地位低下に繋がったのだ、と鷹取論文は主張する。本書の問題関心に引きつけていえば、戦争という暴力のあり方が変われば、その暴力へのまなざしも、また変化したのである。

以上、本書は論考とコラム、合計 12 篇の文章から成る。刊行からまだ時間がたっていないが、すでに『史学雑誌』をはじめとしたいくつかの学会誌から、書評用献本の依頼を受けている。今後様々なかたちで評価され、中国史研究の進展に寄与しうるものと自負している。

(4) 市民向け講座の開催

以上はいずれも、研究者に向けて発信された本研究プロジェクトの成果だが、これに加えて、計画の早い段階で、成果の一部を一般市民に向けても発信すべく、講演会を開催した。2020 年 10 月 1 日、8 日、15 日、22 日に開催した連続セミナー『秦帝国の実像 同時代資料が語る始皇帝の時代』である。新型コロナの影響で、これもオンライン形式での開催となったが、多数の参加者を得て、好評を博した。具体的な内容は人文研の HP (<http://hub.zinbun.kyoto-u.ac.jp/news/renzokuseminar.htm>) に掲載されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 18件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 5
2. 論文標題 軍事制度からみた帝国の誕生：秦から漢へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩波講座世界歴史	6. 最初と最後の頁 95-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 -
2. 論文標題 『漢簡語彙考證』訂補（一） 遣自致、封符、物故	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 簡帛網（オンライン）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miyake (宮宅潔) Kiyoshi	4. 巻 5
2. 論文標題 The Withdrawal of the Qin Army from Qianling Prefecture: From the End of Conquest to the Beginning of Occupation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Bamboo and Silk	6. 最初と最後の頁 73 ~ 105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/24689246-00402016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 -
2. 論文標題 秦の始皇帝 ファースト・エンペラーの素顔に迫れるか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論点・東洋史学	6. 最初と最後の頁 42-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅潔（共著）	4. 巻 96
2. 論文標題 岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注稿 その（四）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東方学報京都	6. 最初と最後の頁 59-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐川英治	4. 巻 6
2. 論文標題 十六国北朝隋唐政権と中華世界	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩波講座世界歴史	6. 最初と最後の頁 83 - 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取 祐司	4. 巻 44
2. 論文標題 漢代兵役考証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館東洋史学	6. 最初と最後の頁 1～45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017688	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鷹取祐司	4. 巻 15
2. 論文標題 長沙五一廣場東漢簡牘・君教文書新考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 韓国・慶北大学人文アカデミー『東西人文』	6. 最初と最後の頁 207～270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鷹取祐司	4. 巻 9
2. 論文標題 長沙五一廣場東漢簡牘・君教文書新考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国中古史研究 呉簡専号	6. 最初と最後の頁 295～342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 11
2. 論文標題 釋秦代的“徭”与“戍”	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 簡牘学研究	6. 最初と最後の頁 90-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 9
2. 論文標題 秦代徭役与兵役制度再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法律史訳評	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸橋充拓	4. 巻 -
2. 論文標題 唐宋変革 中国史の転換点はいつか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論点・東洋史学	6. 最初と最後の頁 62 - 63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MIYAKE Kiyoshi	4. 巻 -
2. 論文標題 Crime and the Place of Execution in Early China	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Itaru Tomiya & Reinhard Emmerich (eds.), Crime and Society in East Asia	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古勝隆一・佐藤達郎・鷹取祐司・宮宅潔など(共著)	4. 巻 95
2. 論文標題 嶽麓書院所藏簡《秦律令(壹)》譯注稿 その(三)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東方学報(京都)	6. 最初と最後の頁 109-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 達郎	4. 巻 70-1
2. 論文標題 党錮事件をめぐる中国歴代の史評	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 達郎	4. 巻 79-2
2. 論文標題 王珪之『齊職儀』の編纂をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 179-204
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 達郎	4. 巻 48
2. 論文標題 後漢時代の軍事思想に関する管見	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西学院史学	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古勝 隆一	4. 巻 95
2. 論文標題 衰世の菩薩戒弟子皇帝—南朝陳における王権と佛教	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東方学報 (京都)	6. 最初と最後の頁 51-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古勝 隆一	4. 巻 -
2. 論文標題 《論語》郷党「立不中門」皇疏考正	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 単周堯教授七秩華誕国際学術研討會論文集	6. 最初と最後の頁 718-732
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古勝 隆一	4. 巻 -
2. 論文標題 漢趙劉淵家屬的儒学背景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大夏與北魏文化史論叢	6. 最初と最後の頁 161-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古勝 隆一	4. 巻 5
2. 論文標題 香纓考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香文化録	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 94
2. 論文標題 秦代徭役・兵役制度の再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東方学報』京都	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮宅 潔	4. 巻 18
2. 論文標題 關於里耶秦簡 755-759簡與 1564簡的編聯	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『簡帛』	6. 最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 達郎	4. 巻 69
2. 論文標題 中国における職官儀注書の出現と官制叙述のはじまり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『人文論究』(関西学院大学文学部)	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取 祐司	4. 巻 19
2. 論文標題 秦漢時代の庶人再考－對特定身分説的批評	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武漢大学簡帛研究中心『簡帛』	6. 最初と最後の頁 75-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取 祐司	4. 巻 -
2. 論文標題 從簡牘資料看漢代的上書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 黄正建主編『中国古文書学研究初編』	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取 祐司	4. 巻 664
2. 論文標題 漢代の民用通行証と通関名籍 肩水金閼遺址出土通関名籍分析のための予備作業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 53-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤井律之	4. 巻 94
2. 論文標題 北魏孝文帝の親征 徵発地域と動員兵数	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東方学報』京都	6. 最初と最後の頁 113-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮宅潔	4. 巻 27
2. 論文標題 「算賦」の誕生	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国出土資料研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮宅潔	4. 巻 11
2. 論文標題 嶽麓〔伍〕48-51簡所見「嬰算多者爲殿」小考 秦代考績制度之一斑	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法律史訳評	6. 最初と最後の頁 140-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐川英治	4. 巻 82-2
2. 論文標題 軍功と賜爵 秦漢二十等爵制の考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 189-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取祐司	4. 巻 11
2. 論文標題 秦漢時代爵制上の身分序列的功能	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法律史訳評	6. 最初と最後の頁 66-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取祐司	4. 巻 46
2. 論文標題 秦漢時代の司寇・隸臣妾・鬼薪白粲・城旦舂 補遺	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 立命館東洋史学	6. 最初と最後の頁 83-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤達郎	4. 巻 51
2. 論文標題 睡虎地秦簡『為吏之道』の性格をめぐる 新発見の吏道書類との比較を通じて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 関西学院史学	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古勝隆一	4. 巻 75
2. 論文標題 『講周易疏論家義記』に見える「義家」について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 達郎	4. 巻 71-1
2. 論文標題 馬融「広成頌」と後漢の田獵・軍礼	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文論究 (関西学院大学)	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鷹取 祐司	4. 巻 26
2. 論文標題 秦漢代『庶人』考証	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国出土資料研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹取 祐司	4. 巻 39
2. 論文標題 秦漢時代對逃犯採取的措施 以《張家山漢簡・二年律令》122-124的分析為中心	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法制史研究 (台湾・中国法制史学会)	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 14件 / うち国際学会 11件)

1. 発表者名 宮宅 潔
2. 発表標題 秦代徵兵制度研究的現状 圍繞基本史料的解釋
3. 学会等名 戦国秦漢簡牘在線研読会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐川英治
2. 発表標題 軍功と賜爵 秦漢二十等爵制の考察
3. 学会等名 東洋史研究会大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鷹取祐司
2. 発表標題 秦漢時代の「庶人」について 身分標識所持説の検証を中心に
3. 学会等名 中国出土資料学会 2021年度第2回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮宅 潔
2. 発表標題 秦の軍事活動與物資籌措
3. 学会等名 第二屆秦漢法律國際學術會議（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鷹取 祐司
2. 発表標題 長沙五一廣場東漢簡牘・君教文書新考
3. 学会等名 慶北大学校人文學院HK+事業団第一屆國際學術會議「古代東亞文字資料研究的現在與未來—以韓國、中國、日本出土木簡資料爲中心—（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 MIYAKE Kiyoshi
2. 発表標題 A Reexamination of the Qin Systems of Corvee and Military Service
3. 学会等名 International Symposium, "Law and Society in Premodern East Asia（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸橋 充拓
2. 発表標題 唐代關内道の軍事財政
3. 学会等名 陝西師範大学西北研究院學術講座（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸橋 充拓
2. 発表標題 隋唐禁衛軍研究の新觀點
3. 学会等名 唐代研究國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸橋 充拓
2. 発表標題 六盤山と涇水 - 「唐蕃戦争」を手掛かりに -
3. 学会等名 中国中世史研究会・唐代史研究会合同シンポジウム（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷹取 祐司
2. 発表標題 關於里耶秦簡9-2283、 5、 6 的文書傳送情況
3. 学会等名 “多元視角下的傳統法律文獻研究” 國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮宅潔
2. 発表標題 嶽麓〔伍〕48-51 簡所見「嬰算多者爲殿」小考 秦代考績制度之一斑
3. 学会等名 出土文献与古文字學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮宅潔
2. 発表標題 “算賦”的誕生
3. 学会等名 中国簡帛学国際論壇2023（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古勝隆一
2. 発表標題 關於《講周易疏論家義記》中所謂“義家”
3. 学会等名 第十三届中国經学国際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮宅潔
2. 発表標題 征服軍の撤退：里耶秦簡よりみた占領統治の展開
3. 学会等名 2022年度中国出土資料学会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐川英治
2. 発表標題 孫呉政治と赤壁の戦い
3. 学会等名 日本中国学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鷹取祐司
2. 発表標題 秦漢時期對逃犯的措施 以張家山漢簡二年律令122-124為中心
3. 学会等名 「國家制度與社會工作坊」線上會議（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古勝隆一
2. 発表標題 井筒俊彦の『老子』理解を分解する
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 宮宅 潔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 256
3. 書名 ある地方官吏の生涯	

1. 著者名 宮宅 潔 (吉澤 誠一郎らとの共編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学	

1. 著者名 佐藤 達郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 483
3. 書名 漢六朝時代の制度と文化・社会	

1. 著者名 宮宅潔(編)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 438
3. 書名 暴力のありか 中国古代軍事史の多角的検討	

1. 著者名 佐川英治(編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 248
3. 書名 君主号と歴史世界	

1. 著者名 宮宅潔（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 602
3. 書名 岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》訳注	

1. 著者名 古勝隆一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 261
3. 書名 中国注疏講義：経書の巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>秦代出土文字史料の研究班 http://www.shindai.zinbun.kyoto-u.ac.jp/index.html 連続セミナー『秦帝国の実像 同時代資料が語る始皇帝の時代』 https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/hub/news/renzokuseminar.htm</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐川 英治 (Sagawa Eiji) (00343286)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森部 豊 (Moribe Yutaka) (00411489)	関西大学・文学部・教授 (34416)	
研究分担者	丸橋 充拓 (Maruhashi Mitsuhiro) (10325029)	島根大学・学術研究院人文社会科学系・教授 (15201)	
研究分担者	佐藤 達郎 (Sato Tatsuro) (30340623)	関西学院大学・文学部・教授 (34504)	
研究分担者	鷹取 祐司 (Takatori Yuuji) (60434700)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	陳 偉 (Chen Wei)	中国・武漢大学・簡帛研究中心・教授	
研究協力者	金 秉駿 (Kim Byung-Joon)	韓国・ソウル国立大学・人文学部・教授	
研究協力者	サンフト チャールズ (Sanft Charles)	テネシー州立大学・Faculty of History・Professor	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	孫 聞博 (Sun Wenbo)	中国人民大学・国学院・教授	
研究協力者	古勝 隆一 (Kogachi Ryyuichi)	京都大学・人文科学研究所・教授	
研究協力者	藤井 律之 (Fujii Noriyuki)	京都大学・人文科学研究所・助教	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 戦国秦漢簡牘在線研読会	開催年 2021年～2023年
国際研究集会 国際シンポジウム「中国古代軍事史の多角的検討」	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	武漢大学			
韓国	国立ソウル大学			
米国	テネシー大学			
中国	武漢大学			